

市民に鍛えられる日々

緑政局緑政課 平成7年入庁

田並 静

須であると考え、森づくりの計画をつくるためのミニフォーラムを行った。この時、役所に入り立ての私は、ワークシヨップのファシリテータをやることになった。初めての経験でとても緊張をしているのに、市民の方々は、私の発する言葉ひとつひとつに「そんなお役所言葉を使うな!」、「我々を行政の下請けにするのか!」などと言いつ、何だかとても好戦的。これが私と彼らの初めての出会いである。

市民と一言でいっても、彼らは森づくりに長い間携わってきた一家言のある方ばかり。翌年、本格的なフォーラムをやろうと呼びかけたときは、「行政のお膳立てしたフォーラムには参加したくない!案は市民がつくる!」と言われ、一旦は案を引つ込めることに。でも一カ月後に市民側から出された案は、我々の案と五十歩百歩であった。その後、毎月一回夜の実行委員会では、侃々諤々の議論が繰り広げられ、何とかフォーラムの開催に漕ぎ着けた。「市民参加による都市の緑地の保全と活用」をテーマに講演会等をし、

市内には、森づくり活動の実績を積んでいるグループがいくつかあるので、こうした市民との共働で事業を進めていくのが必

定員三百名を超える参加で、大盛況だった。「翌年もフォーラムをやる」ということになり、この市民の方々と私は今年で三年目の付き合いになる。この二年間で私が学んだことは、市民との合意形成は急がず、とにかくプロセスを大事にすることである。じっくり話し合うことによつて、お互いのやりたいうこと、できること、そして限界を理解し合い、徐々に信頼関係が生まれてくる。今は冗談まじりに「行政みたいなのを言うなよ」と言われたりもするが、すかさず「行政マンですから」と軽く言い返せる自分がある。私はこうして市民に鍛えられながら、「よこはまの森づくり」に取り組んでいるのである。

あとがき

「開発」という単語からは、通常ならばハードの開発を連想するだろう。しかし本号で特集した「総合的地域開発」にはどちらかといえばソフトの新たな仕組みづくりに関するキーワードが集められた。

その一つ一つを見ると特に目新しい単語ではない。しかし、複数の論文に繰り返し出てくるキーワードは、それが度重なるごとに重みが増していく。

「成熟社会」とは口には達した我々は、次世代のためにその重みをかみしめながら新たな仕組みづくりをしていかねばならないようだ。

総ては複雑に相互連携している。その糸を一度解きほぐし、そして再びわかりやすくまとめ直す作業が必要なのだ。だが、作業をするときにはその糸を切つてしまわないよう、前後の状況を見ながら丁寧にたぐつていかなければならない。その作業からまず始めることこそが「継承」への第一歩なのだろう。

△井上▽

調査季報の読まれ方は、各号の内容や読み手の側の事情によつてそれぞれだ。読み飛ばされる中で、重要なキーワードだけが、薄らと読者の頭の中に残つたり、保存され醸造される時を経て、新たな価値が見出されたり。

しかし、この一三四号は、「旬のもの」としての性格が濃い内容となっている。願わくば、ここで論じられ、提案されたコンセプトが、横浜市の各局区において検討され、まさに「今この時」の施策や事業の展開の中で活かされますように。

△関口▽

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「自主研究レポート」への投稿をお待ちしています。応募される方は、事前に研究の概要をA4紙三枚以内にとまとめて企画局政策部調査課までお送りください。

FAX 六六三-四六一三

お問い合わせは、

電話 六七-二〇二九